

[特別展によせて 2]

きんぎんでいした え わ か かん
宗達筆金銀泥下絵和歌巻について
 —画面構成を中心に—

具引された料紙に、金銀泥で骨風を描く宗達の金銀泥絵は、金銀泥そのものの持つ光輝性、具引きの下地と金銀泥の溶け合う味わい、また、これらから生まれる独特の空間表現など、他の絵画作品にはない特色を持っています。

色紙や短冊のような小さな画面も、絵画作品としては特殊なものです。宗達の金銀泥絵では、モチーフを小さくして画面内に納めるのではなく、大画面の一部を切りとってきたかのようにまとめます。このため、小画面でありながら、大きなスケールと不思議な現実性を備えた作品となっています。

宗達は色紙や短冊の他に卷子本に、金銀泥絵を描いています。ここには宗達の料紙装飾だけでなく、宗達芸術の全体を考える上で、注目すべき画面構成がみられます。以前にも、連歌の懐紙などに卷子本に金銀泥で作画した作品がありますが、これらは独立した場面を横に連続させた観があります。これに対して、宗達の金銀泥下絵和歌巻では、スムーズに図様を連続させようとする配慮がみられます。

京都国立博物館に保管される「鶴下絵三十六歌仙和歌巻」には、全長13メートルにも及ぶ全巻を通して、海上を渡る鶴の姿がダイナミック

に写されています。

ここでは、様々な姿勢をとる鶴を描写することによって、鶴の群を表現するだけではなく、この群像表現を運動表現と融合させることによって画面を構成しています。例えば、浜辺に佇む鶴の群が描かれる巻頭の場面では、右奥から体をひねって前方に視線を向ける鶴が七羽連続して描かれ、餌をついばむ四羽に続きますが、こうして鶴を一羽づつ目で追って行きますと、後方から歩んで来て餌をついばむ動作の連続写真を見ているような錯覚にとらわれます。

同様のことは、ふわりと舞い上がる場面や、大空を飛翔する場面にも言えます。おそらくここに表現されている鶴の運動は、宗達が実際に観察して写したものではなく、学習した様々な鶴の図様からその姿に最もふさわしい運動を読み取り、画面を構成したのででしょう。宗達が動きに対して非常に敏感な絵師であり、画面構成の際にも運動表現が大きな要因となっていることが分かります。

この作品には場面の展開においても興味深い工夫が見られます。大空を滑るように静かに降りて来る場面と大空に向かって羽ばたく場面は、途切れることなく連続し

て描かれます。この展開部では、卷子本は縦に狭い画面であるため、鶴の群を一度画面の外に消してから、再び画面の下限から登場させています。下降する群と上昇する群がこの場面展開によって、見事に調和します。

その際、上部に刷かれた金泥が大きな効果をあげていることにも注目すべきです。この金泥によって、画面上に帯状の流れをつくり、二つの群の運動の方向をはっきりと示しながら、まとめることに成功しています。この流れに乗って鶴が飛んでいくようにも見えます。

この画面の上限と下限を利用した場面展開と画面上に流れをつくり、モチーフを配していく画面構成は、横に長い卷子本に図様を連続させて描く必要上、生まれたものでしょう。時間の進行とともに画面が現われては消えていく卷子本にふさわしい画面構成法です。

今回の展観では出陳されませんが、畠山記念館に所蔵されます「四季草花下絵新古今集和歌巻」の躑躅の場面でも、この帯状の流れに乗せて画面が構成されています。

現在、断簡となつて、諸家に分蔵されています「鹿下絵新古今集和歌巻」には、もう一つの画面構成上の特色が見られます。「鶴下絵三十六歌仙和歌巻」では場面の連続に工夫が見られましたが、この作品では、離れた二つのモチーフや場面が見事に連絡されています。

五島美術館には、雌雄の鹿が描かれる場面の断簡が所蔵されていますが、この二頭は視線で緊密に結ばれており、この視線によって、心理の微妙なニュアンスまで表現されています。当館の所蔵します「伊勢物語図色紙芥川図」に通じる情趣が感じられます。この他、鹿の視線の向く方向によって、鑑賞者の視線を誘導する場面など、「鹿下絵新古今集和歌巻」には鹿の視線が様々な形で活用されており、画面構成に巧みに活かされています。

以上、宗達の金銀泥和歌巻に見られる注目すべき画面構成について述べてきましたが、興味深いこ



四季草花下絵新古今集和歌巻(部分)



舞楽図屏風

とにここに指摘した画面構成は、後期に制作される宗達の大画面作品にも現われています。

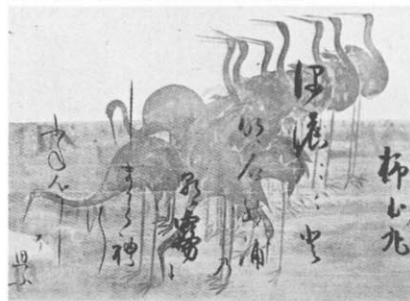
醍醐寺に所蔵される「舞楽図屏風」は宗達作品の中でも、最も緊密な画面構成をとる作品として知られています。この作品では、画面一杯に右上から左下に向かって地平をとり、舞人達を配しています。この画面構成は、先ほど挙げました畠山記念館に所蔵されます「四季草花新古今集和歌巻」の躑躅の場面を想起させます。この作品と同じように、舞人達が踊る地平はゆっくりと流れているように見えます。この流れの中に置かれているからこそ、舞人達は舞楽の微妙な運動を表現し得ているのでしよう。

また、ここに描かれる四組の舞人達は互いに視線で緊密に結ばれ、画面に緊張感を与えています。この視線の効果は「鹿下絵新古今集和歌巻」に、既に見られるものです。

一例を示したにすぎませんが、料紙装飾の制作において宗達が出した表現法は、宗達の大画面作品の中にも活かされていることが分かります。宗達は画業の形成期に料紙装飾を手掛けましたが、この料紙装飾の制作は宗達芸術にとって、非常に重要な位置を占めていると言えるでしょう。

(中部義隆)

鶴下絵三十六歌仙和歌巻(部分)



鹿下絵新古今集和歌巻断簡(部分)

